《受賞関係》

藤田先生の文化功労者を祝して

尾　崎　洋　二（天文学専攻）
osaki@astron.s.u-tokyo.ac.jp

藤田良雄先生（理学部名誉教授）は、1996年度の文化功労者として顕彰されました。先生から直接あるいは間接にご指導を頂きました天文学教室一同にとりまして、この上もない喜びであり、こころからお祝いを申し上げます。

藤田先生は1908年福井県にお生まれになり、福井中学、第一高等学校を経て、東京帝国大学理学部に入学、1931年（昭和６年）に天文学科を卒業されました。そして、東京大学助手、講師、助教授を経て、1951年に教授になられ、1969年３月に停年退官されるまで、天文学科の三教授の一人として天文学の教育、研究に指導的役割を果たされました。その後、東海大学で教えられる傍ら、日本学士院の会員として学術・文化の発展に力を尽くされました。先生は、日本学士院恩賜賞、ベルギー国リェージュ王立科学院の外国人会員、福井市名誉市民など数々の賞、名誉会員などを受けておられます。また、国際天文学連合の「恒星のスペクトル分科会」の委員長、日本天文学会理事長などを歴任され天文学の研究と発展に尽力されました。

先生のご専門は天体分光学、とくに低温度星のスペクトルの研究です。恒星のスペクトル型は、ハーバード分類と呼ばれる分類法によりＯ型、Ｂ型…と星の表面温度が高い方から低い方へと一つの系列に並べられます。この系列の低温度側の端に分子のスペクトルが顕著な星があり、低温度星と呼んでおります。この低温度星では、星の種類によって酸化物のスペクトルが顕著な星と炭化物のスペクトルが顕著な星があることが1930年代にアメリカの天文学者の観測で明らかにされました。これら２つの異なった性質の星が出来る原因として、星の大気の構造が異なるなどの考えが出されましたが、藤田先生は世界に先駆けてこれらの星の大気中での分子の解離平衡を調べられ、これらの差について星の大気中の酸素原子と炭素原子の存在比が重要な役割を果たしていることを明らかにされました。そして、その後の研究で藤田先生の学説が正しいことが判明、低温度星のスペクトル型では通常のＫ型、Ｍ型の系列とは別にＲ型、Ｎ型と呼ばれる分岐があり、それらの差は星の化学組成の差によることが確立しました。Ｒ型、Ｎ型の星は、炭素の存在比が酸素のそれより多い星で、現在では炭素星と呼ばれております。炭素星の研究は、その後の先生の研究テーマの中心であり、また藤田研究室がこの分野では世界をリードして来ました。藤田先生のこのお仕事は、まだ日本の天体物理学の研究が極めて未熟な第二次世界大戦前になされた画期的なもので、先進国である欧米の研究者の関心を引き、これが戦後に藤田先生のアメリカ留学のきっかけにもなりました。

戦後、先生は観測の重要性を強く認識され、ご自身で低温度星の高分散スペクトルを撮りたいという強い希望を持たれました。しかし、日本には先生の望むようなスペクトルを撮影できる大型望遠鏡がありませんでした。そこで、先生はアメリカの天文台に手紙を出し、ご自身の希望を表明されました結果、カリフォルニア大学のリック天文台とシカゴ大学のヤーキス天文台から招待を受け、昭和25年９月から約１年ほどアメリカに留学され、念願のアメリカの大型望遠鏡を使って沢山の低温度星のスペクトルを観測、解析をなされました。

また、戦後の日本天文学会でも大型望遠鏡を持つことの必要性が痛感され、萩原雄祐東京天文台長を中心に大型望遠鏡を作る計画を立てましたが、藤田先生は望遠鏡の建設候補地の予備調査からイギリスの望遠鏡製作会社との折衝に至るまでの大変なお仕事を引き受けられ、その中心になって推進されました。そして、先生のご努力は1960年に岡山天体物理観測所の口径188センチメートルの日本最大の大型光学望遠鏡として実を結ぶことになったわけです。

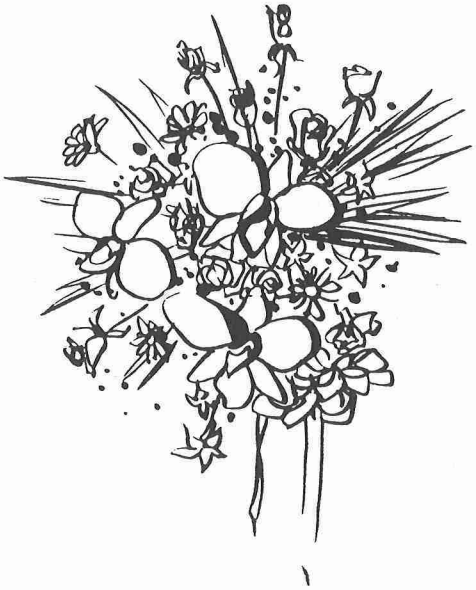
私自身が先生に初めてお目にかかったのは、今から37年前の学生の時です。先生はとても穏やかお人柄ですが、学問に対しては大変真摯な方であるという印象を受けましたが、先生に対するこの印象は、今も全く変わりません。しかし、先生は思いがけないところでユーモアのセンスを発揮されることがあり、例えば、ある年に先生のご専門である低温度星を主題にする研究会がありましたが、藤田先生はその開会の挨拶の中で、当時流行っていた歌手のフランク永井にかけて「低温（低音）の魅力にとりつかれて」という形で話を切り出され、研究会の雰囲気をなごやかなものにされたことを思い出します。また、先生は映画にとてもお詳しく、往年の名画については先生に太刀打ち出来る人は少ないのではないかと思い

ます。

藤田先生について語るに、忘れてはならないことがあります。戦争末期のこと、東京も爆撃にさらされるようになり、東大理学部天文学教室も長野県上諏訪に疎開することになりました。上諏訪では旅館を借りて教官と学生は共同合宿生活をしながら、地元の小学校の部屋を借りて講義、研究を続けられました。天文学教室の疎開先での生活は、当時の学生がつけていた日誌をもとにした「されど天界は変わらず」（龍鳳書房：1993年）という題の本として出版されており、その中に生き生きと記述されております。それによれば、日々の食べるものにも事欠く疎開先においても、藤田先生はそのような事態に少しも動じることもなく、学生に対する天文学の講義を続けられたのです。

先生は現在88才でいらっしゃいますが、きわめてお元気で、日本学士院の院長としての重責を担われております。先生が戦前、戦中、戦後を通じて一貫して育て、見守ってこられた日本の天体物理学は、いまや世界の第一線で活躍するまでに発展を見るに至ったことについて、無量の感慨をお持ちのことでありましょう。先生が今後もますますお元気で、日本の天文学および学術の発展にお力添え下さいますよう、お祈りいたします。

追記：藤田先生についてより詳しく知りたい方のための参考文献

1．藤田良雄著：「星とともに半世紀」1986年 自費出版（天文学教室図書室にあります）

2．「されど天界は変わらず」（副題：東京大学天文学教室諏訪疎開の記録）東京大学理学部天文学教室ＯＢ編（龍鳳書房：1993年 定価 1,500円）